

原爆に 救われた者 の語り

平和教育の一モチーフとして

小 菅 信 子

1 はじめに

私の子どもたちが、ある日、原爆のことに触れて、連合軍はこんなことをすべきじゃなかった、というのです。でも私は、ちょっと待って、といて論しました。原爆が落とされなかったら、あなたたちは今、一人として、ここには存在しなかったのよ。あたしは戦争で生き残れなかったでしょうから。あたしたちのほとんどが、原爆が落とされたとき、あと数ヶ月の命だったの。死にかけていたのよ。

ベラ・ワイス（オランダ人元抑留者）の語りより^㉒

太平洋戦争中に日本軍にとらわれていた欧米人元捕虜や元抑留者のなかには、自分は原爆によって 救われた と語る者たちがいる^㉓。この問題はこれまでも大戦中の捕虜問題を考える上でしばしば取り上げられてきた^㉔。原爆に 救われた と信じる欧米人元捕虜や元抑留者は、しばしば非核・反核平和運動の躓きの石ともなってきた^㉕。そして冒頭でも紹介したように、救われた者 の語りもまた、親から子へと語り継がれてきた。

平和教育は、核の脅威にさらされている人類にとって、その生存のために必要不可欠な教育であるという点に異論はないだろう。藤井によれば、平和教育は、構造的には、戦争と平和についての諸問題を「意図的計画的」にとりあげる「直接的平和教育」と、平和的精神をつちかう「間接的平和教育」とに分類され、とりわけ核時代の平和教育においては、戦争体験の継承・戦争原因の分析・反戦平和の運動史・核兵器や世界の軍事状況の学習・人種差別や民族差別の克服・国際連帯の教育といった、「直接的平和教育」がその中心となる^㉖。

原爆体験の継承は、かくして、「直接的平和教育」のエッセンスにかかわるテーマ

のひとつであり、ヒロシマ・ナガサキは、彼らの体験が継承され、平和運動の礎となることによってはじめて「光」となり、そして「光の背後には被爆者やその家族の長い重い生活史」が刻まれている⁸⁾。

原爆に 救われた者 の語りは、原爆体験を語り継ごうとするあらゆる人々、さらには核時代の日本の平和教育そのものに与えられた、ひとつのパズルである。彼らの語りは、結局、反核・非核の誓いのうえに「平和のとりで」(ユネスコ憲章前文)を人の心のなかに築こうとする人々の躓きの石でしかないのだろうか？彼らはヒロシマやナガサキの犠牲に無知であるがゆえに、あるいは無視することによって、原爆に 救われた と語るのものであるのか？彼らもまた、原爆記念碑のかけから日本の過去を相殺しようとしている論者と同様に、自らの捕虜体験によって原爆犠牲者の受けた苦痛を相殺しようとしているのだろうか？

2 原爆に 救われた者 の語りをいかに聞くか

身近な話題からはじめよう。昨年春、ある友人から、イギリスで、原爆に 救われた と語る元捕虜たちに向かって、「あなたはなぜヒロシマやナガサキの原爆犠牲者に思いをはせないのですか？」と論ず戦後世代の日本人研究者がいると聞いた。

おそらく、この日本人にとって、こうした質問を発することは、自分が 日本人であることを再確認することでもあったかもしれない。

原爆は、日本人にとって、「ユダヤ人にとってのホロコーストにたいへんよく似た特異な受難のシンボル」であり、多くの人々はいまなお「ほとんど宗教的な感覚で、自分達は起きてはならない世界の破滅という、未来の黙示録の光景を目撃するために選ばれたと思っている」と、ダワーは指摘する⁹⁾。1995年対日戦勝50周年にあたって、アメリカのスミソニアン航空宇宙博物館で企画された原爆展第一次案¹⁰⁾に対する元捕虜らの抗議や批判は、戦争の記念や記憶の構造をめぐる日本と欧米の あるいは敗者と勝者の 決定的な違いを再認識させる契機ともなった¹¹⁾。スミソニアン原爆展第一次案に向けられた合衆国世論の批判や反発は、そのほとんどが、「たまたまふれられていた人種差別と戦争の報復性の面」¹²⁾に向けられたが、「人種差別と戦争の報復性」こそ、原爆の記念を通して、多くの戦後日本人が抱え込んできた、対米戦争と原爆投下をめぐるルサンチマンの中心でもあった。

周知のとおり、日本の二つの都市に対して投下された核爆弾の被害に関する情報は長い間合衆国の検閲・管理の対象となってきた。だが、エンゲルハートが指摘しているように、隠された原爆の悲惨さは、隠されることによって原爆の真実から遠ざけられた人の心のなかで、いっそう悲惨なものとなっていったともいえる^N。

原爆に 救われた者 の語りは、三年半にわたって日本軍に囚われた者たち、そして解放後は、核兵器というものをさまざまな意味で正当化する 核の勝者神話 のなかにふたたび囚われた欧米人元捕虜の語りに他ならない。反核が戦後におけるひとつの新しい文化であるとすれば^N、そこでは原爆によって人が救済されるという考え方はむしろ反・文化的にみえる。しかしながら、核兵器に依存することで繁栄を遂げようとする文明と、核兵器を排除することにおいて繁栄を希求する文明との間で、救われた者 たちの語りは、過去における核兵器の使用を正当化することで現在の核兵器の保有を正当化する前者の文明の議論によってからめとられていることをみすえる必要がある。

さらにこの問題を考えていく上で有益な手がかりを与えてくれるのが、松元の論文「原点としてのヒロシマ、ナガサキ」である^N。松元は、被爆体験をふまえて平和を願う広島や長崎の被爆者の態度は、「被爆体験 戦争からの逃走志向型」と「被爆体験 戦争の克服志向型」の、大きくふたつに分類されるとする^N。その上で、松元は、前者すなわち被爆体験からの逃走志向のなかに含まれている重要な問題のひとつとして、被爆者の多くが、アウシュビッツを生き残ったユダヤ人が感じたような、「生き残ったものの後ろめたさでも言うべき感情」を抱え込んできたこと、次のように述べている^N。

〔彼らの生き残ったことへの罪責感〕考えようによってはこの上もなく人間的な感情であり、それを失うことは人間が人間でなくなることだと言ってよいのではないかと私は思うのです。

平和のためにもっと被爆体験を語るべきだということが言われながら、口重く沈黙しがちな被爆者たちに対して、これまで時に、平和に背をそむけるものというような非難が向けられることがないではなかったように私には思われるのですが、それはこのような被爆者の持つ後ろめたさの感情の重たさを理解できなかった心なき浅はかな非難であったと言わなければならないと私は思います^N。

この短い文章はさまざまな暗示にとんでいる。本論の関心にそくしていうなら、「うしろめたさの感情の重たさ」ゆえに「平和に背をそむける」かにみえる者たちがいるということであり、同時に、彼らの感情の「重たさ」がしばしば他から理解され得ないということである。3年半に及ぶ恐怖と暗黒の記憶とともに、人類を滅亡させかねないものによって命が守られた記憶を引き受け、それを語りついでいる人々の感情の「重たさ」こそここで考えていこうとしている問題である。原爆に 救われた と感じている欧米人元捕虜たちを、原爆の犠牲となった人々になぞらえて論じていこうとする筆者の試みに疑問を呈する読者がいるやもしれない、が、 救われた者 の語りを、ヒロシマ・ナガサキを原点とする平和教育のなかに生かしていく努力こそ、スミソニアン論争以降の平和教育に求められている課題である。論争が顕著に示しているように、原爆に 救われた という語りそのものが人々から広い支持を得ることはない。 救われた という語りが積極的な機能を果たすのは、今日ではむしろ、過去の戦争への特殊な称賛意識、過激なナショナリズムや愛国心といった、特定の脈絡においてのみである 彼らを、彼ら自身のヒロシマ・ナガサキの悪夢から解放することが急務である理由はそこにある。

3 交錯するヒロシマ・ナガサキへの思い

イギリス人元捕虜D氏は、一九九七年秋ケンブリッジの元捕虜と日本人の 再会を企図した筆者らによる「日本文化の夕べ」で、なぜ自分が日本人に対する憎悪を捨て和解求めるようになったか、その心境の変化を短く、率直に、居合わせた人々にスピーチした。このスピーチのなかで彼は、捕虜であったとき、自分は、日本軍が一気に叩き潰され、開放されることを望んでいたのに、新型爆弾が日本に落ち、収容所生活が終わった時、躍り上がって喜んだが、あのような破滅を喜んだことは間違いだった、と告白した^N。

翌年春、日本政府は、橋本竜太郎首相（当時）の戦争がひきおこした「心の傷を癒し、和解を広めていこう」という日本の決意を表明するため」の「新しい措置」案に基づいて、在英大使館を通じて、D氏を含むケンブリッジ在住の英軍元ビルマ戦従軍者ら6名を日本に招待した。橋本前首相による「新しい措置」のなかには、「和解や平

和、そして未来への希望といったものを築いていきたいと日本が願っていること」を示すための、英軍元捕虜やその関係者の日本への招聘数倍増が盛り込まれていた。かくしてD氏らの日本招待が地方新聞紙上で紹介されたとき、それまで筆者らとともにケンブリッジの和解ムーブメントに尽力してきたアイルランド人L氏 彼は王立空軍元将校であったがイギリス人と呼ばれることを好まなかった がこれに反発した。

L氏は、D氏や筆者らが王立英国退役軍人会ケンブリッジ分会の支援を得て進めた元捕虜との和解ムーブメントに協力しようと、アイルランド人としての「さまざまな思いを保留」して、あえて 王立英国 退役軍人会のメンバーとなり和解のために活躍してきた。L氏は筆者に対して次のように異論を唱えた。

D氏の苦しみはわかるが、ヒロシマとナガサキに原爆が投下されたから自分は助かったなどと、かりにも人間が考えるべきことではないし、ましてや口にすべきことではない。日本政府は、なぜ、原爆投下は正しかったという者を日本へ招待しようとしているのだろうか？長い間、日本人との友情を培ってきた者ではなく？

4 表明できない心情

たしかに、ヒロシマとナガサキに原爆が投下されたから自分は助かったという語りは人間性に背いている。この歪みはゆえに、原爆によって 救われた と感じる者は決して表明できない心情をヒロシマとナガサキに対して抱きつづけているのかもしれない。

山田盟子は『幻影の碑 戦争と怪談 兵士たちの証言』のなかで、第一次上海事変のときに自決した空閑昇少佐の幽霊の話を紹介している。自決した同時刻に、空閑が営庭に姿をみせたというのである。空閑の幽霊は、終始無言のままであった。これに関して山田は、次のような空閑の元部下の言葉を紹介している。

「自分は皇軍の将校として、立派に自決したよ」と、知らせに来たのでしょうか。むしろ反対のことを言ってくれたら、良かったと思いますよ。だってその後の太平洋戦争で、オーストラリアのカウラ収容所では、偽名で死んだ兵士や軍属

が、五百四十九名もありました。日本に申し訳ないと使った偽名ですよ。むだ死させた戦争屋に、なにを取りいることがありますか。いったいそのことで、だれが詫びてくれましたか[※]。

空閑の自決の理由は、当時公には、敵の捕虜となったことを恥じてのことであったとされた。彼の自決は、「生きて虜囚の辱を受けず」という日本軍の捕虜観の形成に決定的な影響を与えた事件であり、いっぽうで「爆弾三勇士」とならんで当時人々のあいだで最も人気のあった軍国美談であった。状況へ働きかける手段や方法を奪われた者たちの、状況に対する果てしない不安という、決して表明できない心情こそが空閑の幽霊だといえよう[※]。

同じことがこれから紹介する話にもあてはまるかもしれない。

ケンブリッジに暮らすイギリス人元捕虜N氏の話から始めよう。一九九七年初夏、市の中心にあるN氏の自宅に招かれ、日の暮れるまで、彼の捕虜時代の体験談を聞き、彼の収容所体験をもとに制作されたテレビ番組のビデオなどを見た。N氏は、イギリスのアーミー・カレッジで自分の捕虜体験をレクチャーしたり（日本軍の収容所からいかにサバイバルしたか、そのハウツーが講義の主題であったようだ）、一九九五年ケンブリッジ大学ダーウィン校で開かれた戦争の歴史を踏まえた日英相互理解のためのミーティングに参加したりと、収容所体験の継承に活躍してきたが、宗教的な和解活動や、旧軍人同士の和解活動、あるいは日本政府に対する謝罪・戦後補償要求運動には、意図して関与することを避けていると述べた。

N氏はしきりに、日本人の若者達と話がしたいと熱っぽく、ときには涙を流しながら訴えた。でも日本の戦争世代と話はしたくはない その理由をN氏は二つあげた。

ひとつは、先に述べた日英相互理解のためのミーティングにあたって、元ビルマ従軍者で英国において旧軍人同士の和解を進めてきた日本人報告者から、会合の直前に「日本軍が連合軍の反攻に際して捕虜達を皆殺しにしようとする計画をたてていた事実はない。もしこの話をするならば、自分は同席しない」と告げられたことだった。N氏は、捕虜に対する「最後の処断」を日本軍が企図していたことを示す資料は東京裁判においても証拠として提出されており、自分は同じ収容所の捕虜たちとともに自分たちの「墓穴」を掘ることを命じられ、また実際に掘らされたので、この日本人元ビルマ従軍者の主張はとても承服できるものではなかったと述べた。にもかかわらず

最終的に彼の条件を呑んだのは、日英相互理解のための会合と、それをオーガナイズしてきた日本人戦後世代の研究者やボランティアたちの努力を台無しにしたくないと考えたからだと説明した。

もうひとつの理由は、このミーティングのあと、N氏がある日本人の老人から人殺し呼ばわりされたためであった。この事件について、N氏は次のように語ってくれた（ダッシュの部分以下は筆者による質問）。

N氏　ダーウィン校で自分の捕虜体験を語ってしばらくたったある日、ケンブリッジの自宅に近い町角で友人と立ち話をしていると、ひとりの日本人の老人が私を睨みつけているのに気がついた。老人はいきなり私に怒鳴りつけた。「おまえは捕虜だな、この人殺しめ！」

なぜあなたが人殺しなのですか？

それは、この老人の家族が、ナガサキで原爆のために死んだから。もし、あと数週間終戦が遅れていたら私たちは生きていなかった。日本軍の収容所員は、連合軍が攻めてきたら、捕虜を皆殺しにする計画をたてていた。彼らは、私たちに、私たちの死体を埋める墓穴を掘らした。捕虜たちは原爆によって救われた。だから、原爆に家族を奪われたあの日本人の老人は、私を捕虜と知って、「人殺し！」と叫んだのだと思う。

なぜその老人はあなたが元捕虜だとわかったのでしょうか？

おそらく、彼はダーウィン校での日英ミーティングに参加して、それで私を捕虜だと知ったのだろう。

あなたはミーティングでその老人をみかけたのですか？

わからない。会場内にはいなかったかもしれない。

同じ内容の話を、同じ年の夏、今度は筆者らが先に述べた交流会を催そうとしているとき、同地区の王立英国退役軍人会分会のメンバーW氏（戦後世代）から聞いた。すなわち、ケンブリッジには、原爆で家族を失ったひとりの日本人の老人が住んでい

て、彼はこれまでも日英和解や友好のための会合にやってきては、怒鳴ったり騒いだりして会を阻止しようとしてきた経緯があるので、今回の交流会の開催にあたってもこの旨を十分注意してほしいと忠告があった、とW氏は筆者に伝えてきた。

そのうえでW氏は、まंनीちこの日本人老人が会場に乱入するようなことがあれば、今回の試みが台無しになるので、私服警官を会場に配備させ、該当するような日本人の老人がやってきたら、ともかく会場に入れないようにしたほうがよい、と提案してきた。この段階ですでに、交流会には市長と日本大使の参加が決まっていたので、セキュリティは我々主催者にとってきわめて重要な課題となっていた。

それまでも、ケンブリッジ大学校内では、日本人来賓に敬意を表して日の丸が掲揚されるとこれに反発して勤務を放棄する作業員（戦後世代）がいるという話を、複数の人々から聞いてはいた。だが会場に乱入する日本人がいたという話は、そのとき初めて聞くものであった。そこで、この話に該当するような暴力事件が現実にあったのかを警察に問い合わせ、長期在住する日本人の幾人かに、該当するような年配の日本人男性の噂を聞いたことがあるかとたずねた。だが、該当するような事件も人物も、筆者の知り及んだ限りでは、ケンブリッジには存在しなかった。また上の忠告の出席もはっきりさせることはできなかった。

当時のケンブリッジにはナガサキで家族を原爆に奪われた日本人の老人が、本当に、住んでいたのかもしれない。彼はN氏らの日英相互理解のミーティングに本当に出席していたのかもしれない。町角で友人と談笑する元捕虜のN氏にむかって「人殺し」と罵倒したのかもしれない。この日本人の老人は、本当に、それまでも日英友好のための会場に乱入しては、そこに集った者達を当惑させてきたのかもしれない。彼の起した暴力騒ぎが公に記録されていなかったのは、単に会合の主催者がその事件を表沙汰にしたがらなかったためだけなのかもしれない。だが、原爆で家族を失った人々に、はたして、イギリス人元捕虜たちが自分の家族を「殺した」のだという意識が、どれほどあっただろうか？

より明らかにみえたことは、N氏らが日本軍に命ぜられて自分たちの「墓穴」を掘らされたことであり、収容所から解放されたとき自分たちは原爆が投下されなかったら数週間とたたぬうちに死んでいた、と感じたことである。

N氏の語った「ある日本人の老人」は、この二つの間にある何かを手繰り寄せることでその真の姿を我々の前にあらわしてくるのかもしれない。

5 苦痛の 国境

これまですくなくからぬ論者が、欧米人戦争犠牲者との和解を率先することに対してある種の躊躇や保留の態度を示してきた。ドイツの「欧州における戦後和解」に対して、『戦後和解』が達成されていないアジア」という論点の整理の仕方²⁸からも、この問題に対する日本人識者の関心の低さが伺える。

実際、欧米との和解などという考え方は、結局 日本人 のためのものではないかのようなのである。戦争世代の日本人のなかにも、とりわけ宗教的な動機から 敵と和解することに熱心な人々もいるが、多くの戦争世代はなぜいままさら欧米人と和解しなければならないのか訝しがらる人々がほとんどであるといえよう。欧米人元捕虜との戦後和解は、あたかも成田空港のギフト・ショップで売っている日本人形のような、あくまで 欧米人 向けの、日本人 にはほとんどニーズのないものであるかのようだ。

だが、カルスホーベンが述べているように、一般市民のように戦闘に参加しない、あるいは捕虜のように戦闘に参加しなくなった人々に戦争が与えた苦しみは、「国家間の闘いに焦点をあてた戦争の歴史書では、むしろ文字どおり語られることはない²⁹。我々が向き合わねばならないこの問題の本質は、「人としての苦痛」である。「人としての苦痛」が癒される瞬間こそ、「人の心のなか」にはじまった戦争が「人の心のなか」で終るときである。憎悪を抱き続けることは、苦痛をよりいっそう苦痛たらしめる。いまや我々がきのこ雲の下で見る悪夢は、敵も味方も勝者も敗者も入り乱れ、みな一様に焼け爛れ重なり合う廃虚の光景であるが、憎悪こそ、この悪夢を現実とするものである。この意味で、ダワーのいう原爆投下を決断させた真の理由が「肚の底からの憎悪」であるということをより冷静に受け留め分析していく必要があるし、このことは同時に、和解という問題に我々が率先して取り組まなければならない理由である。

欧米 白人 捕虜が日本軍の収容所で受けた、「人としての苦痛」は、人種差や文化差の物差ではかることなく、無条件に認知されなければならない。彼らの受けた「人としての苦痛」を一個の人間の受けた苦痛として認知することが、何より先になされねばならない。文化差の議論であれ、人種差別の議論であれ、あるいは原爆投下

の決断をめぐる議論であれ、いったんそれが「国家間」の問題でとらえられてしまえば、戦争犠牲者の「人としての苦痛」は、「むしろ文字どおり語られることはない」のだ。

欧米人元捕虜に対しては、しばしば、アジア人戦争犠牲者に対してゆめゆめなされないような「文化的アポロジー」たとえば、日本人は人前で謝罪することを死に値する「恥」と考えているがなされてきた²⁴。たとえば欧米人捕虜生活の衣食住をめぐる問題を、文化的の視点から論じようとすることもできるかもしれない。だが日本の捕虜取扱政策は、近代日本において文化 というものがきわめて恣意的に選択されてきたことを示す好例でもある²⁴。欧米人捕虜と食の問題は、つまるところ、嗜好の問題ではなく、量 場合によっては有無 の問題ではなかったろうか？戦後シベリアに抑留された人々は、わずかな黒パンで日々の命と過酷な強制労働を支えていかなければならなかったが、こうした彼らの語りを、食文化の差からとらえようとする試みがなされたとしたら、やはり疑問を感じずにはいられないだろう。日本軍の監視員の目を盗んで米をはじめとする穀類を貪り食った欧米人元捕虜たちの体験を、文化論的言説はいかにときあかしていこうとするのだろうか？ある米軍元捕虜は次のように語っている。

この鉄道〔泰緬鉄道〕を建設するのに一三カ月か一四カ月かかりました。その間に一万六〇〇〇人の連合軍捕虜が死にました。その大部分が栄養失調のためでした。私たちの食料がまともだったことは一度もありませんでした。私たちの身体は痩せ衰え、病気にかかっても薬は何もありませんでした。つらかったのは、多くの友人が傍らで死ぬのを見守ることでした。餓死がおもなものでした²⁴。

多元文化の価値観の普遍性は認められるべきである。だが、文化差の問題を「国家間」のレベルに固定化してとらえたとすれば、戦争犠牲者の「人としての苦痛」はやはり「文字どおり語られることはない」のだ²⁴。

おわりに

ここでは原爆に 救われる ということがいかに人間性に背いているかについて述

べてきた。原爆に「救われた」と語る者には、3年半にわたる収容所生活体験と、原爆による解放体験という二重の苦痛がある。前者に関して彼らの苦痛が癒されぬ限り、後者の苦痛の癒しはありえず、彼らは核兵器に依存する文明の勝者神話の生きた語り部として、よりいっそう硬直した政治状況のなかで利用されていくことになるだろう。彼らを核の勝者神話から解放するために必要なのは、ヒロシマ・ナガサキの記憶の押し付けではなく、まず彼らの「人としての苦痛」を認知することである。癒しはそこに苦痛があることを認知することにはじまる。和解のための方法と手段は、戦争が人の心に植え付けられた憎悪によって画一化されていくプロセスの上で遂行されるとするなら、癒しを必要とする人の数だけあるといえる。それは、さまざまな試みを収束や一致よりも分散や不一致へと促すものとなるだろうが、あらゆる人がそれぞれのスタンスとアプローチによって、きわめて自由な発想で、この問題にとりくむ可能性を示すものでもある。

人の心のなかにはじまる戦争を、人の心において終わらせるために、戦争がもたらした個人の苦痛とそれに対する癒し、赦し、和解について今後はさらに踏み込んだ取り組みがなされる必要があろう。日本にはこのようなキリスト教的含意のあるテーマを議論する精神的下地がないとしばしばいわれてきた。本論がこれらの問題に関するさらなる議論のための一モチーフとなればさいわいである。

《註》

- ㊦ Shirley Fenton Huie, *The Forgotten Ones: Women and Children under Nippon*, Harper Collins; Australia, 1992. 邦訳に、内海愛子解説、小菅他訳『忘れられた人びと 日本軍に抑留された女たち・子どもたち』(梨の木舎・1998年)がある。引用箇所は同邦訳書30～31頁を参照していただきたい。
- ㊦ ある英軍元捕虜は、端的に、「私はアメリカ軍が大日本帝国に原爆を落としてくれたことを神に感謝した。『原爆反対』のデモではよく日本人僧侶が『ヒロシマとナガサキを忘れるな』と唱えているが、原爆が落とされなかった場合の犠牲をまったく忘れている」と述べる(J・エドワーズ著・薙野慎二、川島めぐみ訳『くたばれジャップ野郎!』径書房、1992年)。欧米人元捕虜のなかには、このような原爆観を持つ者が今日なお少なくない。
- ㊦ たとえば、油井大三郎・小菅信子『連合国捕虜虐待と戦後責任』(岩波書店・1993年)、小菅「プロパガンダに利用された追悼のナラティブ」(『世界』1998年12月号)

など。

- ☒ たとえば、かつてケンブリッジの反核市民グループが、ヒロシマとナガサキの原爆犠牲者を追悼して、街の公園に桜の木を植樹しようと計画したことがあったが、このプランは、元捕虜たちの猛反対を受け挫折した。ケンブリッジの郷土部隊は、太平洋戦争中にシンガポールで全員が日本軍の捕虜となり、三年半にわたる日本軍下の過酷な収容生活のすえ、捕虜たちの三人に一人は生きて故郷に帰れなかったという経緯があった。当時この桜の植樹計画を進めたグループの一員であったB・トランプ夫人は、計画が挫折した後も毎年八月になると、原爆犠牲者の追悼と世界平和への願いをこめて、ケム川（ケンブリッジ市街を流れる川）で精霊流しのセレモニーを催す。クチコミと、わずかな数のちらしをみて集まった数十名の参加者は、夫人とその一家の手作りの精霊に灯を点し、平和のメッセージを書きいれケム川に浮かべる。この川には、ほとんど流れらしい流れはないので、水面に浮かんだ精霊は、セレモニーの終わった後もほとんど最初の位置から動かない。参加者がみな帰宅すると、一家は小舟を出して、暗がりのなか懐中電灯をたよりに精霊をひとつひとつ集める。「このまま放っておいたら、環境破壊になるから。」筆者が、元捕虜との「和解」について取り組もうと考えていると述べると、「気をつけて（Be careful）」とことわってから、原爆犠牲者のための記念植樹計画が挫折したことを語った。小菅「英軍捕虜の終わらない戦争」『世界』1997年11月号参照。

また、長崎で被爆した人々のなかには201名の連合軍捕虜も含まれていた（H・クラーク著・園田健二訳『長崎俘虜収容所』長崎文献社・1988年）。このうち捕虜の死亡者は被爆から約1ヶ月で60名にのぼり、犠牲者のほとんどがオランダ人捕虜であった（林えいだい『スケッチ・写真記録にっぽん俘虜収容所』明石書店、1991年）。オランダ人被爆捕虜のひとりシェーファーは、自らの体験をのちに『オランダ兵士長崎被爆記』としてまとめたが、この著作は他の元捕虜らの反発をかいオランダでは発行することはできなかった（日本語バージョンは緒方靖夫訳、草土文化、1983年）。

- ☒ 藤井敏彦「平和教育」山田浩編『新訂平和学講義』勁草書房、1984年、250～69頁；「平和教育」芝田進午編『戦争と平和の理論』勁草書房、1992年、242～56頁
- ☒ 藤井敏彦「平和教育」芝田編『戦争と平和の理論』勁草書房参照。
- ☒ ジョン・ダワー「三つの歴史叙述」トム・エンゲルハート、T・リネンソール編『戦争と正義』朝日新聞社、1998年、78頁。
- ☒ 展示マニユスクリプトについては、フィリップ・ノーピレ、パートン・J・パーンズ著・三国隆志他訳『葬られた原爆展 スミソニアン抵抗と挫折』（五月書房・1995年）を参照されたい。
- ☒ スミソニアン原爆展論争を扱った主な邦語（訳）論著としては、ノーピレとパーンズ

の前掲書をはじめ、油井大三郎『日米戦争観の相剋 摩擦の深層心理』（岩波書店・1995年）、NHK取材班『アメリカの中の原爆論争 戦後五〇年スミソニアン展示の波紋』（ダイヤモンド社・1996年）、トム・エンゲルハート、エドワード・T・リネンソール著・島田三蔵訳『戦争と正義 エノラ・ゲイ展論争から』（朝日新聞社・1998年）、マーティン・ハーウィット著・山岡清二訳『拒絶された原爆展』（みすず書房・1997年）など。

- N ダワー前掲論文、100頁。
- N トム・エンゲルハート「勝者と敗者」『戦争と正義』247～298頁を参照。
- N たとえば芝田進午「反核文化」『戦争と平和の理論』257～64頁参照。
- N 松元寛「原点としてのヒロシマ、ナガサキーその意味を考える視覚」山田編『新訂平和学講義』270～286頁。
- N 松元前掲論文270頁。
- N 松元前掲論文277～280頁。
- N 松元前掲論文277～278頁。
- N 小菅「プロパガンダに利用された追悼のナラティブ」をあわせて参照されたい。
- N 山田盟子『幻影の碑 戦争と怪談 兵士たちの証言』光人社、1994年、10～15頁参照。
- N 佐貫浩『平和を創る教育 平和と人権のための教育学試論』新日本出版社、1994年、153～8頁参照。
- N たとえば国際シンポジウム「ヨーロッパの戦後和解」（国際文化会館主催）を報じる朝日新聞の記事（1999年10月11日朝刊12版）。
- N 藤田久一他著『戦争と個人の権利』日本評論社、1999年、3頁。
- N *Independent* (26 May 1998) の論説は、マルチカルチュラルイズムの価値観のもとに日本の戦争世代に謝罪を求めることが「恥の」日本文化にてらして間違っているとす議論を紹介批判している。
- N この問題については、拙論“Religion, the Red Cross and the Japanese treatment of POWs”, Towle et al, *Japanese Prisoners of War* (Hambleton Press, 2000) を参照していただければ幸甚である。
- N 『アメリカの中の原爆裁判』、94頁参照。
- N 日本における文化的差異をめぐる言説の問題性については、吉見俊哉「雑誌メディアとナショナリズムの消費」を参照（小森陽一、高橋哲也編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、1999年、195～214頁）。